
School Friends

まるぼー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

S c h o o l F r e n d s

【Nコード】

N 0 6 0 8 A

【作者名】

まるぼー

【あらすじ】

母を事故で失った主人公その悲しみをのりこえて多くの友達や恋人と、出会う感動恋愛ストーリーー

第1話・出会い（前書き）

初めて投稿するんでうまく、書けたかわからないけど頑張って書き
ました

第1話：出会い

チュン！チュン！

秋

「はあゝ。よく寝た。」

俺は、大きなあくびをしてベッドからおりた。

そして、机においてある写真にあいさつをした。秋

「おはよう。母さん。」

写真にうつっているのは4年前に事故で死んだ母さんだ。
着替えを終えて朝食をとり下に降りた。

秋

「おはようございます。父さん。」

俺の父さんは、一代で莫大な財を築き上げた、法条グループ社長だ。
だけど、いつも仕事で家にいなかった父さんを俺は、あまり好きではない。

秋

「こんな時間にいるなんて珍しいですね。」

父

「ああ。まったくだ。秘書のスケジュールミスで貴重な時間を無駄にした。」

秋（朝から顔を合わせたと思ったら、この男は）父
「今日から、お前もあたらしい学校だったな。」

秋

「ええ。」

父

「勉強やスポーツにおいて、誰にも負けてはならんぞ。」

秋（またその話かよ。もううんざりだ。）

秋

「分かってます。それじゃ、行つてきます。」

鞆をもつて玄関をでた。

「坊ちやま、お車でお送りしましょうか？」

秋

「いや、いいよ。歩いていくから。それに父さんももう少しで行く
だろうからさ。」

秋

「さようでございますか。ではお氣をつけて。」

「うん。ありがとう。いつてきます。」

そして、高校へ歩いて向かった。

ガヤガヤガヤガヤ

121A教室―

「なあ、確か今日だろ。転校生くんの。」

「ああ。吉川はそういつてたけど」

「どんなやつがくんだ？」

「女がいいよな」

「男だったらどうする」

「ヤキいれてやるか」

『ハハハハ……』吉

「よし皆席つけ。転校生を紹介するぞ。」

「男・女？」

吉

「男だ。」

「な〜んだ。つまんねーの。」

吉

「そうゆうこと言うな。じゃあ入ってきて。」

ガラガラ

吉

「転校生の……」

秋

「法条秋俊です。よろしく。」

「けっこうよくない。」

「うんうん」

吉

「法条は、私立紫電高校からきた。皆仲よくしてやってくれ。」

ダッ！ダッ！ダッ！ガラガラ

浩

「ふう〜。間に合った。あれ……」

吉

「浩人また遅刻か！！たく、今日は許してやるから早く席につけ。」

浩

「珍しい。」

吉

「じゃあ秋俊の席は……」

女

「先生ここ、ここ空いてるよ」

吉

「そこは休んでるだけだろ。え〜と、あっ浩人」

浩

「えっ！」

吉

「お前の隣空いてるだろ。」

浩

「ええ。」

吉

「じゃあ、秋俊君あの席について。」

秋

「はい」

ガタ

吉

「じゃあHRは以上。1時間めの準備しとけ」

女・男『ねえねえ、なあなあ、今どこに住んでるの、前の学校どうだった？』秋

「ええ」と

浩

「よ。秋俊、1時間め体育だから俺が案内してやるよ。」

秋

「うん。ありがとう。」

浩

「よし。行こうぜ。」

浩

「まったく、あいつら迷惑っていう言葉知らねえのか。」

秋

「ありがとう。けっこう困ってたんだ。」

浩

「たくつ。ちゃんと言わねえとだめだぞ。」

秋

「うん。だけど断るのにかたで。」

浩

「はあ。あつ、自己紹介まだだったな。俺は九条浩人よろしく。」

秋

「僕は法条秋俊よろしく。」

浩

「法条ってまさかあの法条グループの？」

秋

「うん。父さんがやってるから、別に僕には関係ないけどね。」

浩

「ふう〜ん。やべ、早くいかねーと始まっちまう。」

秋

「急ごう。」

浩

「そっちじゃなくて、こっちだ。」

秋

「でも矢印で書いてあるよ。」

浩

「あっそうだった。」

秋

「頼むよ。」

浩

「わりいわりい。急ぐぜ。」

秋

「うん。」

- 体育館 -

「よし。じゃあ今日は、男子がバスケット、女子がバレーをやるぞ。それぞれ分かれてチーム作って始める。」

浩

「秋俊。一緒にやろうぜ。」

秋

「うん。」

「ジャンパー前へ」

ピッ！

ダンダンダンダン

浩

「秋俊いけー」

ヒュッ！

秋

「決める。」

「させるか」

バツ！

（なに、かわした。）

ダン！

「ダブルクラッチして、ダンクだど！」

秋

「ふうー。まあまあかな。」

浩

「ナイス秋俊。」

秋

「そんなことないよ。よしもう一本。」

ダンダンダン！

「パスだ！」

ヒュッ！

浩

「甘よ！」

パシッ！

「クソ」

浩

「秋俊！！もう一本いけー！！」

ヒュッ！

ダンダンダン！キュッキュッ！！

「ゴール前固めろ」

スッ！シュッ！！

「何！！」

パサッ！！

（スリーポイントだと！）秋

「やったー！！入った。3点ゲット。」

浩

「ナイツシュウ秋俊！！お前どこからうっても入るな。」

秋

「けっこうバスケは得意だからね。」

「……………！！ピッピ―！！」

「そこまで。90対8でBの勝ち。」

『ありがとうございます。』

体育が終わって教室に戻る途中、先生に呼び止められた。
なんだろうっと思って話を聞いた。

「お前のバスケの実力はすごい。どうだ、バスケ部に入らないか？」

秋

「すみません。僕部活に入るつもりはないんで。」

「そうか。まあ、一応考えておいてくれ。」先生はそう言うと、体育教官室へと入っていった。

- 教室 -

二時間め・・・3時間め・・・4時間め・・・キンコーンカーンコン
4時間めの終わるチャイムと同時に、ほとんどの生徒が教室から出ていった。

浩

「あゝあ。終わったか。」

秋

「よく眠れたか？」

浩

「ああ。さして飯にするか。どこで食う。」

秋

「天気もいいし、屋上で食べようよ。」

浩

「んじゃ。行こうぜ。」

俺は、浩人と一緒に屋上へと向かった。

購買へ行っている生徒が多いのか、屋上にはあまり人は、いなかった。

俺と浩人はベンチに座って昼食を食べ始めた。

浩

「おつ、秋俊の弁当うまそうじゃん。ひとつくれよ。」

秋

「おいおい。自分のがあるだろ、しかたないなあひとつだけだぞ。」

浩

「へへへ。サンキュー。」

パクッ。

浩

「くう~~~~。うめ~~~~。この卵焼きすごくうまいな。誰が作ったんだ?」

秋

「全部俺が作ったんだ。」

浩

「へへ。お前料理もできるんだ。」

そう言いながら浩人の箸がまた、俺の弁当へとのびる。

秋

「おいおい。ひとつだけだっていったろ。」

浩

「いやー。わりいわりい。あんまりうまいもんでつい。」

2人で談笑しながら食べていると、突然……

明

「あなた達、なにしてるの。」

男1

「あゝ。なんだてめえは。関係ねーだろ。」

明

「校内でタバコを吸うなんて、私が許しません。」

と、言い争いが聞こえてきた。

なにかと思つて顔を向けると、そこには、一人の女子生徒と、二人の男子生徒がいた。

男1

「別に、吸つたってかまわねえだろ。」

男2

「あんまりうるせーと、犯すぞこら。」

明

「そつそんなことで、私はひきません。先生達に言いますよ。このこと。」

男1

「何だと、このアマ。」

男2

「女だからって容赦しねえぞ。」

2人の男子生徒が女子生徒に、殴りかかろうとした。

秋

「やべ〜」

タツタツタツタツ。

ヒュッ！ガシ！

すんでのところで、男の腕を掴むことができた。秋
「お前ら女一人に対して、二人がかりはないだろ。」

男1

「なんだてめえは。関係ねえ奴はひっこんでろ。」

男（何だこいつ、ふりほどこうにもすげえ力だ）秋

「確かに関係ないけどさ。女の子助けるのは、男の役目だろ。」

男2

「何いってやがんだ、この野郎。」

男子生徒が、俺に殴りかかってきた。ヒュッ！

俺は、すんなりかわすと足をかけて相手を転ばした。スッ！ドテン！
男2

「よくもやりやがったなてめえ〜。」

浩

「もうその辺にしとけよ。そうしねえと、俺が相手になるぜ。」バ

キ！！ベキ！！ゴキ！男1

「くっ！覚えてるよてめえら。」

そう言いながらさっさと二人は屋上から消えていった。

秋

「君、大丈夫。けがとかなかった？」

明

「うん。ありがとう。助けてくれて。」

浩

「な〜に。たいしたことしてないから。」

秋

「本当に大丈夫。」

明

「うん。」

浩

「っておいこら〜。俺をシカトするな。」

明

「ふふふ。そう言えば、自己紹介まだでしたね。私は、四法院
明あきひろ
この学院の生徒会長をしています。」

浩

「俺、九条浩人二年B組。でこっちが……。」

秋

「法条秋俊。同じく二年B組よろしく。」

明

「こちらこそよろしく。秋俊君に、ええ」と……なんだっけ。

「

浩

「ガーン！ひどい。ひどすぎる。」

明

「うそ。うそ。浩人君でしょ。よろしくね。」

キンコンカーンコン！明

「あつ！チャイムだ。早く教室にもどろ。」

秋

「うん。」

浩

「ああ。」

「教室」

5時間め数学の授業

先

「誰か、この問題解けるやつ。何だ、誰もいないのか。じゃあ。そのお前。」

生

「えーと、あれがこうなって、あーだから。うーん、わかりません。」

先

「前の授業聞いてればできる問題だぞ。高2にもなって、分かりま

せんは、ないだろう。このバカ。」

生

「すみません。」

先

「しばらく、たつてろ。じゃあ、つぎは、秋俊やってみろ。」

秋

「はい。」

黒板の前にやってきて、スラスラススラ！
解くのに約1分かった。

秋

「つと、これでいいですか。」

先

「かつ完璧だ。」

秋

「あつ、ちなみにここをこうすれば、もっと早く解けますよ。」

そういつて、黒板に書いた問題の一部を指差した。

先

「そつそうなのか？」

秋

「ええ。大学のレポートで見ましたから。」

先（まっ負けた。私が、自称数学博士の私が、生徒に。）

「きつ今日の、じつ授業はここまでにする。あつあとは、各自で自

習しててください。」

ガラガラピシャッ！

ワイワイ。ガヤガヤ。

キンコーンカーンコン！六時間めも終わり、帰りのS・H・Rも終わって帰ろうとしたとき、後ろから声をかけられた。

浩

「秋俊。一緒に帰ろうぜ。」

秋

「いいよ。どこかよつてくか？」

浩

「いいね。カラオケ、ゲーセン。」

秋

「カラオケにするか。」

女

「ねえ私たちも、いつていい。」

そういつて、2、3人の女子が声をかけてきた。秋

「うん。いいよ。」

そうして駅前のカラオケボックスにはいった。浩

「時間どうする？」

女1

「3時間ぐらいでいいんじゃない。」

女2

「うん。それぐいでいいよ。」

秋

「じゃあ、3時間で」

店

「3時間で1980円になります。」

秋

「ここは、俺が払っておくよ。」

女

「ありがとう。秋俊君」

俺は、サイフから2000円をだすと店員に渡した。秋
「あっ、おつりはいいです。」

- ボックス -

女1

「最初誰歌う?」

女2

「うん。どうしようか」

浩

「じゃあ、ここは、白狼学院のポップスの、キング（自称）がいく
か。」

そう言うと浩人はマイクをもって、歌い出した。
く……………

浩

79点

「低く!!」

秋

「じゃあ、次は俺が」

女1（秋俊君、何歌うんだろ楽しみ）

浩

「何歌うんだ。」

秋

「うゝん。陽炎の『君に会いたい』」

浩

「おいおい。一番難しい歌だぞ。」

）・・・99点

女2

「秋俊君、すごい」

浩

「まっまあまあじゃないか。」浩

「負けてたまるか。」

秋

「おいおい。女の子にも歌わせてやれよ。」

その後も、みちつり3時間歌いまくった。

駅でみんなと別れて、家についたのは、7時を少しすぎてからだつた。

秋

「ただいま。」

要

「お帰りなさいませ。坊ちやま。」

秋

「ただいま、要さん。家でも、秋俊でいいっていつてるだろ。」

この人は、西紀 要さん。

俺より、ひとつ年上のお姉さんみたいな感じの人だ。

俺と同じ白狼学院に通ってる。

要

「そういう訳にはいきません。学院でも、会うことは少ないじゃないですか。それより、夕食になさいますが、お風呂になさいますか。」

「

秋

「じゃあ、ごはんで。」

要

「かしこまりました」

秋

「父さんは帰ってる?」

要

「いえ。まだお帰りになっていません。」

秋

「そう。」

秋（また仕事かよ。まったく。）

秋

「じゃあ、着替えてくるから、食堂に用意しといてくれる。」

要

「かしこまりました。坊ちやま。」

．．．．．夕食を終えて部屋に戻った。

秋

「ふゝ。寝る前に本でも読むか。」

本棚から一冊本をとりだして読み始めた。．．．秋

「ふあゝ。寝るとするか。」

電気を消して眠りについた。

．．．．．次の日ザーザー俺は、雨音で目が覚めた秋

「っん。今日は雨が。ついてないな。」

そついいながら、ベッドからおりた。

着替えをすませて、食堂に向かうと父の怒声が聞こえてきた。

父

「バカモノー！！昨日あれほどいったのに、またミスをしおって。」

秘

「申し訳ありません」

父

「謝って済む問題ではない。もうお前などいらん。首だ。」

秘

「そんな。御願いですどうかそれだけは。」

父

「いや。お前は首だ。」

秋

「父さん、別にわざとやった訳じゃないんだから。」

父

「二度も同じミスをするような無能なやつは、いらん。」

カチン！！

秋

「父さん！今の言葉取り消せよ！この世に完璧な人間なんて、いるわけないだろ！誰にだってミスぐらいあるだろ。それを、無能なやつなんて言うなよ。」俺は、父さんにくってかかった。

父

「親の言う事に、子供が口をだすな！！」

秋

「親？親だつて。あんたが俺に、俺に親らしいことしてくれたことがあんのかよ！！いつもいつも、仕事仕事ってただ逃げてるだけだろ。母さんの葬式の時だつて、仕事を言い訳にして来なかったじゃないか。そんなあんたが、親のことなんて言うんじゃないか。パシンッ！！」

渴いた音が俺の頬から聞こえた。

秋

「かつ 要さん。」

俺の頬をうつたのは、要さんの温かいてだった。

要さんの目には、涙がたまっていた。

要

「秋俊さん。いくらなんでも、そんなこと言っではいけません。旦那

那様は、いつもあなたのこと、奥様のことを考えておいでです。けして、仕事を言い訳にして逃げてなんかいません。」

父

「要くん。もういい。さがりなさい。」

要

「旦那様」

父

「確かに秋俊の言うとおり、仕事を言い訳にして逃げていたのかもしれない。私は信じたくなかった。命の死を、だから、仕事に没頭することで命の死を忘れようとしていた。だから、必要以上にまわりに厳しくしていた。」

そういった父さんの目から、涙が流れ落ちた。

父

「すまなかつたな。秋俊。つらい思いをさせて。霧枝くん。今回のことは、わすれよう。また頼むよ。」

秋

「父さん。」

秘

「はっはい。」

父

「学校に遅刻するぞ。早く行きなさい。要くんもな。」

要

「あっ、はい。」

秋

「ごめん。父さん。なにも知らないずに、あんなこと言って。」

俺がそういうと父さんは、優しい笑顔をくれた。

それは、初めて見た父さんの、心からの笑顔だった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0608a/>

School Friends

2011年1月12日14時26分発行